

■ コロナ禍での学校の様子

9月末から10月にかけて、新型コロナウイルスの感染者数が県内、市内においても大きく減少し、現在は感染状況が落ち着いてきているように思います。

市内の小中学校の感染不安による欠席児童生徒数も、全日授業が開始された13日を境に、大きく減少しました。

しかし、まだまだ一定数、感染不安による欠席者もみられ、たとえ登校しても、感染不安を抱えている子どもたちも居るかと思えます。感染不安等で欠席している子どもたちに対しては、オンラインによる学習支援も最大限に活用して、しっかりと取り組んでください。

■ 子どもたちの生活状況

生活調べアンケートの結果より
【実施期間：令和3年6月28日～7月9日 対象：市立小中学生】

小学生

	休業中	学校再開後	令和3年1学期
総合点 得点平均	8.97	7.00	7.89
気持ちの安定度 得点平均	4.69	4.20	5.08
生活の安定度 得点平均	4.28	2.81	2.81

中学生

	休業中	学校再開後	令和3年1学期
総合点 得点平均	9.74	8.00	9.41
気持ちの安定度 得点平均	4.81	4.54	5.77
生活の安定度 得点平均	4.94	3.45	3.64

休業中：令和2年5月25日～5月29日の期間にアンケート実施
学校再開後：令和2年6月29日～7月3日の期間にアンケート実施

※評価得点は、アンケートの質問項目を「気持ちの安定度」「生活の安定度」に分類し、点数化したもの。得点が高いほど状態が悪いという評価になる

1学期には各校に子どもたちの生活調べアンケート調査を行いました。アンケート結果を見ると、「生活の安定度」が昨年度の休業中が非常に悪い状況であり、学校に通うということが生活の安定に大きく寄与していることが、データでも確かめられました。

また、昨年度の「学校再開後」のアンケート結果より、小中学生とも総合点の状態と、特に「気持ちの安定度」の状態がよくなく、この特徴は中学生の方が顕著でした。

昨年度から続く新しい生活様式に一見馴れたように見える子どもたちですが、コロナ禍で制限された生活が続いていることや、未だ先行きが見えない状態の中で精神的なストレスを今も強く感じているのではないかと考えられます。

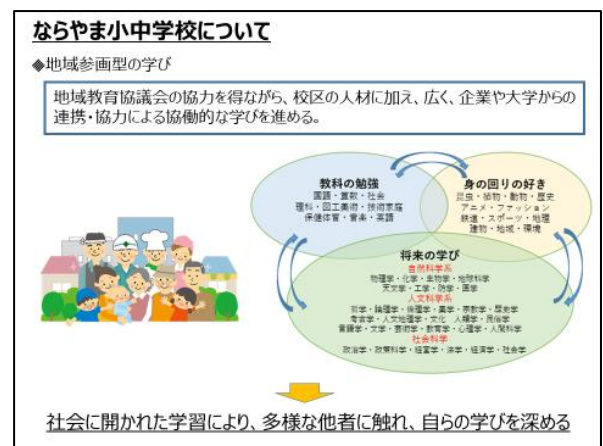
今後の取組としては、【友達から聞いたSOSを身近な大人に発信できる力を伸ばす】、【児童生徒が自身のSOSを発信できる力を伸ばす】、【児童生徒が「話を聞いてもらえた」という体験を積み重ねる】という3点を学校内で共有し、出来る限り教職員と子どもたちの垣根を低くし、子どもたちが誰にでも気軽に相談ができる環境づくりを改めてお願いするとともに、きめ細やかなケアをお願いします。

■ ならやま小中学校、一条高等学校附属中学校

令和4年度には、本市4校目の施設一体型小中一貫校である、「ならやま小中学校」と、本市唯一の公立中高一貫教育を行う「一条高等学校附属中学校」が開校します。

ならやま小中学校では、子どもたちが多様な人たちと一緒に学ぶ姿を創造する仕組み作りを行い、探究的な学習を進めていきます。

今までの教育的な概念に捉われないことなく、試行錯誤しながら、果敢に新しい学びにチャレンジ頂きたいと思っています。



一条高校附属中学校について



一条高校の探究テーマタイトル（一例）	
校舎の形状はなぜ画一的なのか	
世界の高校生に勝つためには	
魚に味覚はあるのか～魚の好みは何味？～	
なぜ難民が住む地域に偏りができるのか	
ICHIJO HALL完全攻略マニュアル	
最も飛ぶペットボトルロケット（宇宙への第一歩）	

◆探究フロンティア

企業や大学と連携した活動や、自然や地域の歴史に触れる活動など、本物に触れ、体験的で探究的な活動を進める。



自分で課題を立て、解決までの力を育成し、新たな価値を創造し、よりよい社会を実現しようとする態度を養う。

一条高等学校附属中学校についても、「探究的な学習」や「社会と繋がる学び」を実践していきます。

6年間を通した探究的な学習を通して、教室での学びと実社会とのつながりが実感できるよう、企業や大学と連携した活動や、自然や地域の歴史に触れる活動など、本物に触れ、体験的な活動を進めていきます。こうした探究的な学習を進める中で、課題を自ら見つける力や物事を様々な面から捉え、解決する力、新しい価値を創造する力を育成しようと考えています。

これらの学校は、本市の目指す教育を体現していこうとするもので、各校においてもその理念を共有し、子どもの実態や地域の特性に応じて新たな教育を実現してもらいたいと思います。

■ これからの教育について

先日、「各校へのオンラインによる学習支援の状況」として聞き取りをさせていただきました。

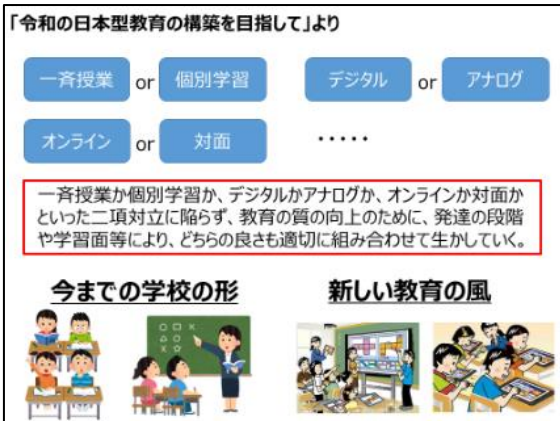
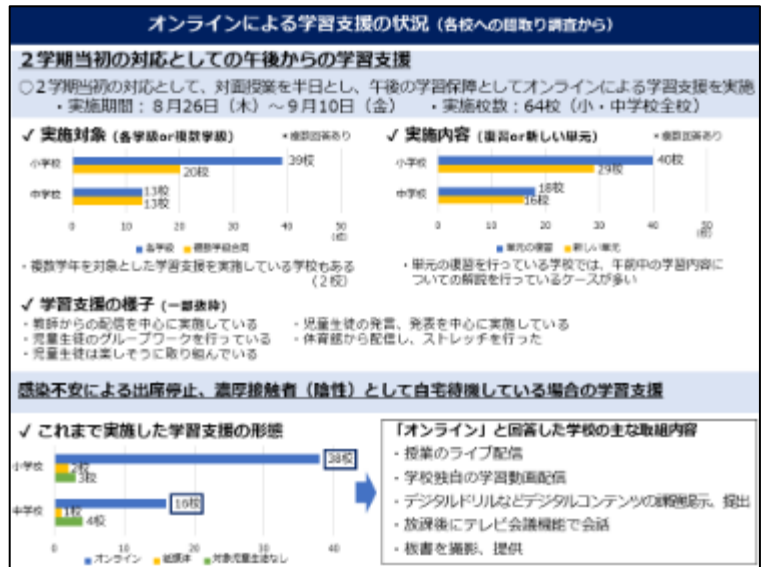
複数学級や複数学年を対象とした支援を実施している学校や、午前中の対面授業とうまく組み合わせて活用している学校もありました。

また、感染不安や、濃厚接触者として自宅待機している子供たちへの学習支援としても、オンラインを活用し、授業のライブ配信やデジタルドリル等のコンテンツの課題提示、学校独自の学習動画の配信等、取り組んでいる学校もあります。

一方で、デジタルコンテンツ使用状況を見てみますと、使用状況が学校によって差がある等、まだまだ、十分に活用出来ていない部分もあります。

学校の全てが ICT に置き換わることはないと思いますが、たとえコロナが収束しても、これまでの教育に、そっくりそのまま立ち戻ることなく、これまでの教育とデジタルのハイブリットを進めてください。

一方で、デジタルが苦手な子や、個別に支援が必要な子どもたちについては、よりきめ細やかにサポートをしていただき、誰一人、取り残される子どもたちがいないように支援も進めてください。



今年1月にまとめられた中教審答申の「令和の日本型教育の構築を目指して」では、「一斉授業か 個別学習か、デジタルかアナログか、オンラインか対面かといった二項対立に陥らず、教育の質の向上のために、発達の段階や学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていく。」と示されています。

「今までの学校の形」か「新しい教育の風」か、どちらか一方に偏るのではなく、今までの学校の良いところに、どのように新しい風を送り込むとよいかを考え、教育を進めてほしいと思います。